

あり、個々の症例に適した投与量、投与間隔の検討が必要とされる。

6 進行再発性大腸癌に対する CPT-11/5-FU 併用療法の治療成績と安全性の検討

船越 和博・本山 展隆・藤井 知紀
佐藤 牧・稲吉 潤・新井 太
秋山 修宏・加藤 俊幸

県立がんセンター新潟病院内科

【目的】 進行再発性大腸癌に対する CPT-11/5-FU 併用療法の治療成績と安全性について検討した。

【対象・方法】 進行再発性大腸癌 13 例，A 法 6 例：CPT-11 100mg/m² day 1, 8, 15, 5-FU 300mg/body day 1-15. B 法 7 例：CPT-11 150mg/m² day 1, 15, 5-FU 600mg/m² day 3-7.

【成績】 A 法：奏効率 50% (PR3), B 法：奏効率 42.9% (PR3). A+B 法：奏効率 46.2%. 効果持続期間中央値：4.7ヶ月, MST：20ヶ月, 1年生存率：67%. Grade 3以上の血液毒性：A 法 50%, B 法 14.3%.

【結語】 A 法, B 法に奏効率に差はなく, 有害事象は A 法に多く認められた。CPT-11/5-FU 併用療法の奏効率は 46.2% と単独療法より高く, first-line chemotherapy として有用である。

7 大腸癌肝転移に対する肝動注化学療法の治療成績

大谷 哲也・山本 睦生・山崎 俊幸
桑原 史郎・片柳 憲堆・斎藤 英樹

新潟市民病院外科

1997年6月から2002年6月までに治療がなされた大腸癌肝転移 40 例 (H1:21, H2:4, H3:15) を対象とした。40 例中 24 例は同時性肝転移で, 16 例は異時性肝転移であった。40 例中 27 例に対し計 32 回の肝切除が施行され, リザーバー留置による肝動注化学療法は 20 例になされた。化学療法は, 5-FU を 1000mg/m² 毎週動注し, 10 回投与毎に CT で肝病巣の評価を行った。奏効

度は CR 4 例, PR 4 例, NC 6 例, PD 6 例で, 奏効率は 40% であった。5-FU 総使用量別の奏効率は, 15g 未満 0%, 15g 以上 30g 未満 31%, 30g 以上 50% であった。20 例中 2 例は, リザーバー使用不能 (感染 1, 閉塞 1) となり化学療法を中止した。肝切除例の 4 年生存率は 45.9%, 肝動注化学療法例の 4 年生存率は 37.2% であった。大腸癌肝転移に対する Weekly high dose 5-FU による肝動注化学療法は安全で有用な治療方法である。

II. 特別講演

「進行大腸癌の化学療法」

県立がんセンター中央病院
総合病棟部内科医長

白尾 國 昭

第 51 回新潟大腸肛門病研究会

日 時 平成 15 年 6 月 14 日 (土)
午後 3 時～5 時 35 分

場 所 新潟東急イン 3 階 華の間

I. 一般演題

1 直腸原発 GIST の 1 手術例

横溝 肇・瀧井 康公・藪崎 裕
土屋 嘉昭・佐藤 信昭・梨本 篤
田中 乙雄・佐野 宗明

県立がんセンター新潟病院外科

直腸原発 GIST の 1 例を経験したので報告する。